

報道

に関わる仕事

取材・文／伊藤敬太郎 撮影／田中史彦 イラスト／桔川 伸

新聞・テレビなどの既存メディアに加えて スマホの普及でネットメディアも台頭！

政治・経済・国際情勢や事件・事故、さらにはスポーツや生活情報まで、世の中で起きているさまざまな出来事を人々に伝えるのが報道の仕事。新聞やテレビの他、最近ではスマートフォンの普及でニュースアプリなどのネットメディアも台頭し、注目されている。そんな報道の世界で活躍するプロフェッショナルをまとめて解説！

さまざまな報道メディア

新聞

誰もが知っている全国紙以外にも日本各地で地方紙が発行されており、政治・経済からスポーツ、地域情報などのさまざまなニュースを発信。特定の業界に向けた業界紙も多数ある。

雑誌

雑誌にはいろいろな種類があるが、政治・経済・ビジネスの専門誌や時事問題を取り上げる週刊誌などは報道のカテゴリー。ニュースの全体像や背景を掘り下げて伝える。

テレビ・ラジオ

テレビ局やラジオ局には報道局など、ニュースを専門的に扱う部門があり、記者やカメラマンなどが活躍。ともに速報性が高く、特にテレビは映像で情報を伝えられるのが強み。

ネットメディア

報道メディアの新興勢力。他メディアなどが作成した記事を独自の視点で選んで紹介するキュレーションサイトから、自社で取材し、オリジナル記事を発信するサイトまで幅広い。

通信社

新聞社や放送局などに、自分たちが取材した記事を提供する国内外の組織。国内で有名なのは共同通信社や時事通信社。新聞記事やテレビのニュースには、通信社提供のものも多い。

【マークの見方】

- 新…新聞
- 雑…雑誌
- テ…テレビ
- ラ…ラジオ
- ネ…ネットメディア
- 通…通信社



報道カメラマン(スチール)

事件・事故・災害の現場や記者会見・インタビューなどに足を運び、新聞・雑誌に掲載する写真を撮影する仕事。一瞬をとらえた写真を通して「そこで何が起きているのか」を伝える。新聞社などの社員のほか、フリーで活躍する人も。【新・雑】

取材記者

新聞社や雑誌社、放送局などに所属し、現場での取材と取材内容をまとめた記事の執筆を担当する記者。大手メディアでは、右のように専門分野が分かれている。国際部の記者は特派員として海外に駐在することも。【新・雑・テ・ラ・ネ・通】

- 記者の専門分野
- ・政治部
 - ・経済部
 - ・社会部
 - ・国際部
 - ・文化部
 - ・科学部
 - ・生活部
 - ・運動部
 - ・地方部
 - ・医療部
 - ・教育部
 - など

報道のプロセス

情報を集める

報道の第一歩は取材から。記者が出来事の当事者や関係者に話を聞き、カメラマンが写真や映像を撮影して、ニュースの素材を集める。



報道カメラマン(映像)

テレビの報道番組で使用するニュース映像を撮影するカメラマン。取材現場で動き回れるよう肩に乗せるハンディカメラを使うことが多いが、最近は、事故・災害現場などの撮影にドローンを使うことも。テレビ局や番組制作会社などに所属。【テ】

情報をまとめる

編集会議で、その日の紙面構成や番組内容を決める。担当の記者やスタッフは取材で集めた素材を記事やニュース映像にまとめる。



整理記者／編集者

新聞の場合、見出しや紙面構成を考えるのは整理記者。テレビ・ラジオはディレクターが、雑誌・ネットは編集者が情報をまとめる役割を担う。ネットでは独自の視点で情報を集め、まとめるキュレーターという仕事も注目。【新・雑・テ・ラ・ネ】

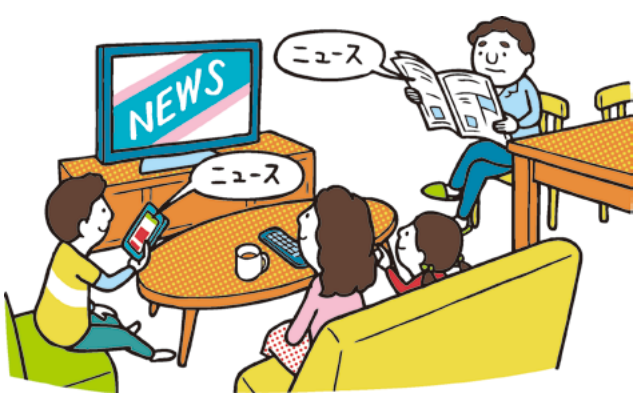
情報を伝える・届ける

新聞は印刷し、配達・販売。ネットメディアはWebサイトを日々更新。テレビ・ラジオはニュース番組を放送して最新の情報を人々に伝える。



キャスター／アナウンサー

テレビやラジオでニュースを伝える役割を担うのがキャスターやアナウンサー。番組の司会・進行を務めるキャスターはニュース原稿を読むだけでなく、ニュースの背景や今後の展開などについて、自分の意見を語る力も求められる。【テ・ラ】



Webエンジニア

スマホのニュースアプリは、ユーザーが関心のあるニュースを優先的に表示する、SNSと連携する、新着のニュースが届いたら通知するなど、他のメディアにはない多様なサービスが魅力。それを支えるのがWebエンジニアの技術だ。【ネ】

校閲

記事中の誤字・脱字、表現や固有名詞などの誤りをチェックし、修正する仕事。過去の記事や資料と照らし合わせて事実関係なども確認する。新聞社では校閲記者と呼ばれ、ニュースを正確に伝えるうえで大切な役割。【新・雑・テ・ラ・ネ・通】



フリージャーナリスト

組織に所属せずフリーの立場で、自分の関心のあるテーマや依頼を受けたテーマを取材し、記事にしたり、書籍にまとめる。自分で写真や映像の撮影まで行う人も。新聞などの記者として経験を積んで転身するのが一般的。【新・雑・テ・ラ・ネ】

フリーで活躍する人たちも

最新の業界事情

大手新聞社もネットでの ニュース配信に積極的

大きな動きはネットメディアの台頭。スマホの普及に伴い、自分の欲しい情報を手軽に入手できるニュースアプリが多数登場し、人気を集めている他、大手新聞社などもネットでのニュース配信に積極的に取り組んでいる。また、一般市民が「市民記者」として地域のニュースをアップするサイトも登場するなど、インターネットによって報道の方法やあり方が大きく変わりつつある。

一方、ネット上でのフェイクニュース(虚偽報道)などが問題視されるなかで、報道する側の職業倫理もより厳しく問われるようになっている。

「ニュースピックス」は、経済・ビジネス関連のニュースを専門的に扱うニュースアプリ。提携メディアが提供する記事の他、自社独自の記事も充実させているのが特色だ。

野村さんは、この独自記事の企画・取材・編集・執筆を担当する。「単に日々の出来事を追うのではなく、特定のテーマに関して背景や今後の潮流を読み解く記事を作成します。例えば、トランプ大統領誕生時には、アメリカに飛び、その分野で著名な大学教授に取材して日本経済への影響をまとめました」

経済に影響する出来事から、業界動向、最新テクノロジーまで扱うテーマは幅広い。企画を立て、編集会議で提案し、採用されたらキーマンや企業への取材を重ねていく。企画立案の原点にあるのは好奇心だ。

「日々、メディアから情報を収集するのはもちろん、話題の場所には行ってみる。最新の製品は使ってみる、興味のある人には会ってみることでさまざまなヒントが得られます」

説明能力も大切だという。企画を提案する際にも、取材依頼の際

この職業に就くには

大学にメディア学を学ぶ学部・学科もあるが、編集者が扱う分野は幅広いので、どのような学部・学科で学んだことも仕事に活かせる。実際、編集者の出身学部は多様だ。「メディアが大きく変わりつつある今は、どのメディアで働くのかわからない、ビジネス戦略を組み立てる力も求められる」(野村さん)ため、その点を意識して学部・学科を選んでほしいという。

職種 PICK UP!!

編集者

株式会社ニュースピックス
編集部 エディター
野村高文さん(30歳)



愛知県立岡崎高校、東京大学文学部卒業。2010年に新卒で出版社に入り、2年目から雑誌の編集に。2014年にコンサルティング会社に転職し、コンサルタントを経験した後、2015年から現職。編集のほか、セミナー開催などの会員向けサービスを行う「NewsPicksアカデミア」のプロジェクトマネージャーも務める。

氾濫する情報を整理し 指針を示す記事を作成

にも「なぜ今このテーマか」「どんな切り口の記事にしたいか」を明確に伝えることが求められるからだ。

「今は断片的な情報が氾濫している時代。だからこそ、自分たちがそれらを整理して、指針になるものを提示することで、読者であるビジネスパーソンの行動に影響を与えることができる。そこに、このメディアならではのやりがいを感じます」

野村さんの「一日」

会社が自由な働き方を導入しており、会議などがなければ自宅で仕事をしてもOK。野村さんは週3日ほど出社。午前中はミーティング、午後は原稿執筆や企画立案などを行う。19時ごろに仕事を終えた後は、人と会食。